

宗門の傳法について

小 西 存 祐

一

宗門の傳法は、古來傳宗と傳戒との二つに分れ、謂はゆる兩脈相承といふことに成つてゐる。是は宗門の中興といわれ、又傳法制度の創定者といわれてゐる了譽聖岡上人の傳戒論（淨全十五八九六頁）に

凡於淨土二宗有二三血脈、所謂宗脈與三戒脈是也。若傳宗之時必以傳戒、此條殊淨土二宗學者彼此一同也。といつて在るのに依準したもので、いかにも夫れが正しいことと思はれる。

ところが室町の末期ごろから、この傳宗傳戒のほかに、今ひとつ布薩戒の傳法といふものが起つてきて、在來の兩脈相承が三脈相承といふことに變つてきた。

是は兩脈のなかの傳戒が、よしその正統は自分の宗門にあるにしても、もと／＼他宗のうちに發生し他門の傳法であるところから、なんとか自分の方にも、自宗のうちに起原をもつた獨自な戒法が欲しいといつた教會史的な要望に加へ、今ま一つは、一身のうへに二つの血脈を傳授されてみても、それが心のうちで平行して對立をしてゐるといふのでは、頗る安定を缺く恨がある。できるならばそれを一つに統合したいものだといふ個人的な要求もあり、

さいわひ念佛は萬德所歸の法で、防非止惡の功能も自然にそのうちに含まれてゐるといふところから、念佛の道共戒的性格を布薩の長養性と結びつけ、それを布薩戒と稱して念戒一致の戒法を唱へ出すにいたつたものと思はれる。然しそれを、いつ誰が唱へ出すにいたつたかといふことに就いては、今日なほそれを立證するに足るだけの明確な文獻が発見されてゐない。がしかし、室町末期に出來た圓戒關係の傳籍中に、さうした記事の見へてゐるところからみると、略ぼその前後に發生したものだといふことが、だいたい云へるわけである。

二

それで布薩家の唱道するところによると、この戒はもと宗祖が夢定中にをいて、大唐の善導和尚から親しく傳受をせられたもので、宗門最上の秘法とされてゐる。宗祖は是がために廣略の戒儀を作り、鎮西、記主、白旗と以下傳々次第して相承せられ、近く明治の末期にまで及んだのであるが、その根據とされてゐる『淨土布薩式』(卷二)なるものが、頗る検討を要するものである。

と言ふは、今書は相當古い時代から宗祖の選述として、現に問師の傳戒論(淨全十五頁)などにもその名前が擧げられてゐるが、少しく注意をしてその内容を窺つてみると、その中に陰陽男女の祕釋などがあつて、すこぶる彼のコラプトした一念義亞流の口吻を想はしむるものが多分にある。是は何ふしても宗祖の選述とは認め難いものである。

されば紀伊總持寺の大江(南)和尚をはじめ、瓔珞卷の敬首律師、緣山の太玄僧正などは、續いてその偽妄を唱へ、次いで明治の初年、行誠和上なども切りにその廢止を強調せられたけれど、成功をみるには至らなかつた。然しそ

の後、いろ／＼と研究が進められた結果、明治四十五年一宗の協賛をへて全く廢絶をされることになった。

三

それで布薩戒は現在では、宗門の傳法から全く除外されてゐるのであるが、江戸の中期にあつては、一宗最極の祕法として、恰度かの台密の蘇悉地大法のやうに非常に尊重をされてゐたのである。現に徳本上人の別傳のなかに（淨全十八四三九）次のやうな記事が見えてゐる。曰く、

師の常に「淨土宗の至極は稱名の一法にあり、この外に沙汰すべき道なし」との給へるにつきて、或人の曰「師はいまだしり給はずや、淨土宗には布薩と申こと侍り、これをもて至極とす念佛のみにあらじ」と申しつを聞給ひて、念佛に勝れたる法門はよにあるまじとおぼしながらも、法門無盡なり猶さる事もやなど、聊おぼし煩給ひしところ、一夜誰ともしらず一卷の文を出して、「これなん布薩よ」といひつるをみれば、例の一枚起請文にぞありける。兼てさもこそ思ひつれとおぼすに、やがて夢覺たり。師の粉引歌のはじめに、これが萬行具足の戒よとの給ひしは、この冥告の旨を述給へるなり——と。

いかにも布薩戒は、宗祖に始まつた傳法では斷じてない。確かに是は、當時にをける教界のいろ／＼な情勢に刺戟されて發生した宗門の自主的精神の發揚で、その限りにをいて全く妄傳だと斷じなければならぬ。

併し念佛の眞諦的信念が、實際にをいて俗諦生活に體現されてくる場合、そこに一種の規範性を帯びて、謂はゆる布薩戒と稱するがごとき念戒一致の形態をとつてくるにいたるといふことは、これ亦た否定することのできない事實である。

導師の般舟讚(淨全四^{五三}頁)に、念々稱名常懺悔といふことが申してある。是はお互ひにかく有らねばならぬ。かく爲ては成らないといふことは、みな誰でもよく解かつてゐる。解かつてゐて、而かも夫れがその通ほりに遣れないのが我々の現實である。この淺間しい——そしてそれを自分で何ふすることもできない無力な自分の實際を反省する時、われ／＼は佛の力に縋らずにはをられない。それが聽て布薩戒ともなるわけである。

又宗祖の登山狀(淨全十六^{五〇}頁)に、次のやうな一文が見えてゐる。

それ十重をたもちて十念をとなへよ。四十八輕をまもりて四十八願をたのむは、心にふかくこひねがふ所なり——と。

是は宗祖が一念義などの邪見に對して、正信本願、兼信因果の正見を述べられたのであるが、それを特に梵網經の十重四十八輕戒と大經の十念と四十八願とを對照せしめて述べてゐられるところ、暗に念戒一致の氣もちを仄めかしてゐられるものとも見るのである。

四

尙それについて、勅傳第四十六(淨全十六^{六七}頁)に、鎮西上人の傳記が載せてある。その中に次のやうな記事が見えてゐる。

文永の比、聖光房の弟子然阿彌陀佛と勢觀房の附弟蓮寂房と、東山^{アカツケ}赤築地にて四十八日の談義をはじめし時、然阿彌陀佛をよみくちとして兩流を校合せられけるに、一として違するところなかりければ、蓮寂房の云、日比勢觀房の申されしことは、いますでに符合しぬ。予が門弟にをきては、鎮西の相傳をもて我義とすべし、さらに

別流をたつべからずと。

これによりてかの勢觀房の門流は、みな鎮西の義に依附して別流をたてずとぞうけたまはる——と。

この兩流の校合は、宗門では非常に有名な事からで、屢々あちこちの書物にも引用されてゐる史實なのであるが、古來その校合の内容については、全く不明とされてゐた。

所が大正十四年に刊行された石塚(東海中
學校長)コーツ(青山學院
教授英人)兩師多年の勞作になる英譯勅修御傳の註釋(P. 759.)に依ると、わが宗祖の所見は、念戒は互ひに相資の法で、遂には一致すべきものと見てゐられたと云ふ點をいて、然連兩師の意見は完全に一致したと言ふのである。

それは百萬邊知恩寺に、古くから布薩法と稱する文書が在つて、そのなかに「鷄明」といふ文字が見へてゐる。然しその意義が不明であつたがため、久しく學者の間に疑問とされてゐたのであるが、最近寺田(京都府
久世郡)の三緣寺にこれまで嘗て開かれたことのなかつた文書が発見されて、それが赤築地のシノニムであることが解かつたことに由るのである。

それで自分は、一遍その文書を自分にも確かめ、又世間へも紹介をしたいと思つて、早速それらの兩寺へ出掛け、御尋を試みたのであるが、生憎いろんな事情でその志願を果たすことが出来なかつたことは遺憾である。併しいつかは必ずそれを實現することができると思つてゐる。

五

それで布薩戒は、傳法としては上述のやうな理由で當然否認さるべきであるが、宗義の實際的活現としては、殊

にこれから大に強調されて往かなければならないと考へてゐる。さすがに椎尾博士のごときは、夙にこの點に着目をせられ、その廣い深い研究よりして、昭和六年「授戒講話」といふもの一卷を刊行してゐられる。頗る後生を資益されてゐること多大である。

今ま本學報の發刊に際し、係りのほうから何か一文をとの勸めに遇ひ、別に是といつて纏めた持合せがない。忽卒敢てこの一文を草し、御挨拶に代へた次第である。